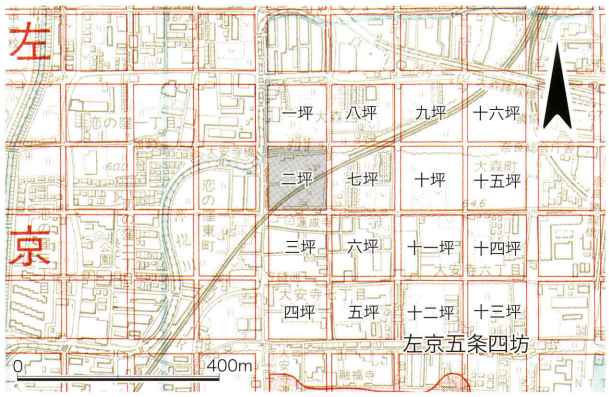
帆立貝形の周溝をもつ「円墳」

埋没古墳 / 平城京跡（左京五条四坊二坪）　大安寺七丁目

はじめに

ＪＲ奈良駅から南へ約 500 mの場所に広がる水田地帯で、平成 13 年度からＪＲ奈良駅南特定区画整理事業に係る発掘調査を継続して実施しています。平成 29 年度は、平城京の条坊復原による左京五条四坊二坪の南東部で発掘調査を行いました。二坪内ではこれまで３回の発掘調査を行い、奈良～平安時代の掘立柱建物・東西溝・井戸・土坑などが確認され、坪内を分割し中小規模の宅地として利用されていたことがわかりました。また、平城京造営によって削られた東西 13 m、南北 12 mの方墳（５世紀後半頃）が見つかっています。

今回の調査は、これらの調査地よりJR大和路線を挟んだ南東側で行い、奈良時代の掘立柱建物・掘立柱列・井戸・土坑とともに古墳１基の存在を確認しました。



調査地位置図　1/15,000

新発見の古墳

今回発見した古墳は、墳丘が大きく削られ、埋葬施設・葺石・段築は確認できませんでしたが、周溝の一部が残っていました。古墳の規模は、直径約 21 mの円墳と考えられ、幅約 4.5 mの周溝がめぐっています。特筆すべきは、墳丘南東側で周溝が幅約 14 m、長さ約８

発掘区全景

mの規模で張り出し、その平面形が帆立貝形をしていることです。この部分には前方部が築かれておらず、一部石敷をした低い島状の高まりを確認しただけで、なぜ周溝だけが張り出しているのかは不明です。また、墳丘東側の周溝内には幅約 1.0 m、高さ約 0.3 mの陸橋状の高まりと周溝の東側底面では周溝外縁に沿って幅約 0.3m の小溝を確認しました。検出状況より周溝を掘削した際に掘られた溝であると考えられますが、機能については不明です。

周溝の埋土は、上層が明黄褐色砂質土で奈良時代前半の土師器・須恵器とともに埴輪が、下層が灰色粘土で埴輪が出土しました。

このことから、上層は平城京造営時に墳丘を削って周溝を埋めた整地土、下層は周溝が機能している時期の埋土と考えられます。埴輪は、墳丘裾に近い周溝内から主に出土しましたが、もとの位置を保つものはありませんでした。墳丘上に配置されていたものが転落したものと考えられます。

出土遺物

今回の調査では、周溝から円筒埴輪と家形埴輪が出土しました。

出土した埴輪の多くが円筒埴輪であり、復原できるもので口径約 38㎝、底径約 37㎝のものが出土しています。胴部には断面が台形の突帯を貼り付けており、段数構成や貼付間隔は不明ですが、突帯の剥離部分で凹線が確認でき、工具を用いて均等に割り付けたことがわかります。透孔は方形と半円形のものがあります。内外面の調整は残存状況が悪いため不明です。埴輪は野焼きであり、全体的な特徴から 4 世紀後半頃に作られたものと考えられます。

家形埴輪は、切妻造もしくは入母屋造の屋根の一部と考えられ、屋根頂部（屋頂部）の大棟端部が出土しました。屋頂部外面に網代の棟覆を表現しており、赤色顔料で彩色されています。軒裏には棟木を装着していた痕跡があります。

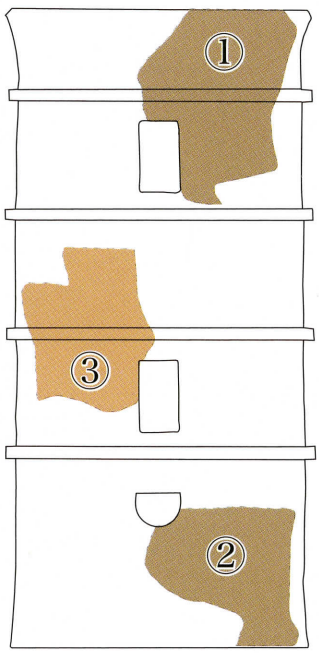
まとめ

平城京内ではその造営に伴って多くの古墳が破壊されたようです。

今回の調査で発見した古墳もその一つで、出土した埴輪から 4 世紀後半には築造された小規模な円墳であることが明らかになりました。また、墳丘は円墳ですが周溝の平面形が帆立貝形をしているといった特徴を持っています。

このような古墳は今のところ類例がなく、今後検討が必要です。今回の調査地から約 50m 西側でも 5 世紀後半の方墳が確認されていることから、継続的に在地の有力者がいたことが推定できます。

出土した埴輪



円筒埴輪の復原模式図